

金色夜叉 (こんじきやしや)

尾崎紅葉の畢生(ひつせい)の長編小説。1897年(明治30)から1902年にかけて(読売新聞)に断続連載。空前の人気作で、漸次刊行され、上演もされて流行歌を生むなど、未完中絶ながら、作者の名を不朽にした名作である。金銭ゆえに許婚者の鳴沢宮(しぎさわみや)に捨てられた有為の学生間貫一(はざまかんいち)が、高利貸に身を落として金への妄執に生きるという物語で、資本主義社会の不滅の主題たる金銭の人間破壊を正面からとらえ、復活を愛の再発見に求めている。野心的な社会小説の側面をもち、西洋小説にヒントを得たという。近代リアリズムの観点からは、時代や金銭の本質の描破に至らず、通俗に流れた点が批判されるが、多くの共感を呼んで明治・大正のベストセラーであった。

土佐 亨 (c) 1998 Hitachi Digital Heibonsha, All rights reserved.